

CBC ニュース Merry Christmas



祈りと礼拝
神学校の朝は早い。冬の朝五時はまだ真つ暗だが、学生は、三々五々、それぞれの祈りの場へと向かう。大きな声で祈る者、静かに聖書を読む者、声高らかに賛美を歌う者……。形は様々であるが唯一にして、真の神に向かつて切なる叫び声をあげている。神学校生活における最大の恵みの一つは、毎朝のチャペルである。学生三六名が集い、ひとつ思いで礼拝を捧げる。八時一五分、神の臨在を感じながら、賛美が捧げられ、礼拝が始まる。賛美は実に変化に富んで

主よ、この一日も 私たちを訓練して下さい

— 神学校生活の紹介 —

いる。聖歌からワースップまで、司会者は選曲に工夫を凝らしている。時には、ギターにベース、ドラムにピアノと様々な楽器をもって賛美する。このような力強い賛美の中に、主の聖なる臨在を感じることはしばしばある。みことばを取り次ぐのは、十名の先生方と、最上級生の四名である。説教者は、個人的な悩みなど、知る由もないのに、聖霊によって、まことにさやかに、今日必要なみことばを語る。このチャペルにおいて、神学生はどれほど慰められ、励まされ、力づけられたことであろうか。

伝道集会

毎週金曜日、夜七時半から、隣接する中央聖書教会において、学生伝道集会が行われている。神学生の学びは、机上の学びだけでは決して十分ではない。伝道集会は、みことばを行う者と

なるためには欠くことの出来ない訓練のときであり、また、愛する主を伝えることが出来る喜びの時でもある。

伝道集会の奉仕は、路傍伝道班、個人伝道班、トラクト配布班、トラクト作成班、病院伝道班の五つに分かれて行われる。オウム真理教の影響で、四月から約半年間、路傍伝道が出来ない状況にあったが、十月から再開された。それ以降新しい人が二、三名導かれてきている。

神学生にとって一日一日が、これからの伝道者としての歩みを形作る尊い日々の連続である。主よ、この一日も私たちをご訓練下さいと、祈りながら。



静心

神学校に銀杏の木がある。秋になると、銀杏を鈴なりに実らせる。銀杏は、焼いて食べれば香ばしくておいしいし、茶わん蒸しにもかかせない。またおせち料理など、冬の食卓を飾る料理の重要な一素材である。

しかし、銀杏が黄金色の肌をあらわし、あの香ばしい香りを発して、食卓に上がるまでには、長い行程を経なければならぬ。銀杏は本当に臭い。まず、悪臭放つ銀杏を地面に埋め、果肉を腐らせる。そして、再び掘り起こし、外側の果実を剥ぎ落とす。きれいに洗ってから、天日に干し、乾燥させることも必要だ。さらに、堅い強固な殻を割り、ようやく、その実があらわれるのである。

伝道者のたまごである神学生は、まさに、銀杏の実である。銀杏が通る行程を経なければならぬ。祈りによって研がれ、友によって研がれるのである。完全に自己を埋葬し、自分の力は剥ぎ取られ、強固な自我は打ち砕かれる。時には、悪臭を放ちながら。しかし、このようにして、キリストのよき香りと光を放つものとなっていくのである。(T・N)

CBC ネットワーク



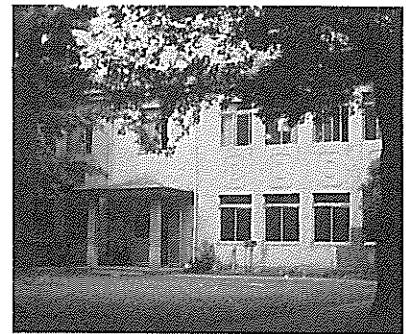
祈りのネットワーク

海外宣教祈禱班

CBCには、十の祈禱班がある。それぞれの重荷によって集まり、共に祈るのである。そのひとつに海外宣教祈禱班がある。そこでは広く海外に目を向け、とりなしの祈りが捧げられている。火曜日の夜、六時半から教師一名を含む、学生十一名が、一つとなって祈る。前回のCBCニュースで紹介された「祈りのネットワーク」による祈禱課題に沿って祈るのである。日本から送り出している宣教師(北村師、佐藤師、樽山師)や今年

寮、一部改修!

中央聖書学校の寮が建設されたのは、四六年前の一九四九年である。火災や地震からも守られて、今日に至っている。寮生として感動を覚えるのは、一期生からずっと、教団のほとんどの先生方が、この寮で学生時代を過ごされているという事である。であるから、派遣先などでは先輩の先生方と「昔〇〇号室でね……」などと話に花が咲いたりの廊下、ぜいたくな間取りと高い天井……。そこに積み重なった時間の流れを感じるのである。



しかし、住居としては大分傷みが激しくなってきた。最近、二カ所の修繕がなされた。ひとつは女子寮のトイレ。従来は、和式四つの本間に狭い間取りであったが、現在は洋式三つのゆったりとした間取りになった。さらに、そのうち二つは中央聖書教会からの献品によって、ウォシュレット・タイプになった。もう一つは、男子寮の風呂場である。一・六M×一・一Mの内、風呂桶が三割を占めるスペースに多いときは三人すし詰め状態で入っていたが、二倍の広さに改築されたのである。おかげで、消灯までに、全員が入浴できるようになった。有形・無形の信徒の尊い祈りのおかげで

って支えられていることを覚えて感謝は尽きない。

ダビデの石奨学金 報告

ダビデの石奨学金制度は、九三年度より、全国諸教会からの献金によって始められました。九四年度には三名、九五年度には十二名の学生がこの制度を利用するに至っています。諸教会の経済的支援、そして、祈りによる霊的支援に心から感謝いたします。

編集後記

一九九五年も暮れようとしています。阪神大震災、地下鉄サリン事件など、本当に終末的で、喧噪な一年でした。主にあって堅く立ち、世に光を放つ中央聖書学校でありたいと願っています。このCBCニュースも、主からの恵みをお届けできれば、と思います。

編集責任者 北野耕一

新聞部部長 野崎晃美、山田博、長沢牧人、前田謙仕、吉田美恵子
事務局 豊島区駒込三一一五

二〇 中央聖書学校
TEL 〇三三九一八四九二五

I B U K I

レポート

シリーズ 献身 Vol.5

献身

山城晴夫

「ウジャ王が死んだ年に、私は高くあげられた王座に座しておられる主を見た。」(イザヤ六：一)

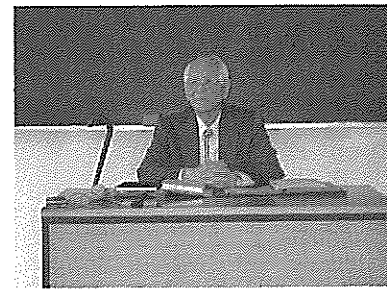
これは預言者イザヤの召命の場面のことである。

ここに、私たちの召命について考えさせられることがある。ウジャ王はユダ王国の王の中でも傑出した偉大な王であり、イザヤにとっても彼の存在は大

きなもので、彼から受けた影響も決して小さいものではなかったと思われる。

イザヤが神を見るといふ霊的体験を持ったのは、ウジャ王が死んだ年であった。すなわち、イザヤから人間的依存が取り去られた時、神が働き始められていたのである。

献身者にとって最も大切なことは自分に死に切ることである。自分にとってのウジャ王が何であれ、それが献身への妨げとなっていることがないだろうか。



者となるためである。この講義は北野耕一師の担当であるが、五月九日は弓山喜代馬師をお迎えしての特別講義であった。

下さった。一同、アッセンブリー人としての責任の重さ、そして、神の恵みを感じながら、共に祈り、講義は終わった。

献身者準備会、開かれる

十一月二三日、献身者準備会が開かれ、献身を志している六名の兄弟姉妹が参加した。午前中、二時間の授業とチャペル一時間のプログラムが組まれ、それぞれ、神学校生活を体験した。授業は、普段と何も変わらない授業のはずであったが、どこかしら新鮮な空気が漂った。ある学生は、自分が献身し、神学校に行くことを考えている時のことを思い出し、心新たにせられたと言う。

チャペルでは佐布校長が、講壇に立ち、「自分史を書いたマタイ」という説教題で語られた。マタイは実に謙遜に自分の献身の生涯を福音書の中に書き綴っている。これは記録能力に長けた彼のタラントを生かした結果であり、純粋な献身の産物であった。あなたも主に出会って変

次にイザヤは自分の罪深さを認め告白している。真の意味において罪を認識し、悲しみ、捨てなければ、神にもちいられることは決してない。「神への愛はみずからの罪の認識の深さに比例する」と言われている。私たちがいかに罪を認めたとしても、自分ではどうすることも出来ない。

イザヤのもとにセラフィムのひとり飛んで来て、祭壇の上からもって来た燃えさかる炭火を彼の口に当てた。それは燃え

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴット教団の誕生は、弓山師を抜きにしては語れない。聖霊の御業をただ文献だけからだけでなく、生きた証人の口を通して学べることは、学生にとって大きな恵みである。特別講義ということで、先生を囲み、茶菓が用意されていたが、先生が語られるとピンとした空気が張りつめ、学生達の目は先生に向けて一点に集中した。「人間は何かやろうと思ったら力が必要である」これを反するように

えられた人生を主に捧げ、自分史を綴りなさい、と勧めがなされた。また、現代の社会情勢を鑑み、終末の切迫感と召しに対する厳粛な応答を求められた。

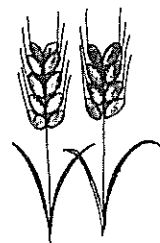
また、授業では、哲学、文化人類学、ローマ書研究、伝道学、ヘブル書、教会史、宣教学の七つの授業が行われた。神学校では、実に多くの新しい知識が提供される。学びの得手・不得手はあるが、神学生は海綿のごとく学ぶ。とにかく学ぶ。神学校以上に学びに適した環境はないのである。

しかし、神学校で大切なものは勉強だけではない。寮生活の交わりや諸奉仕を通しての訓練も

尽きた全焼のいけにえであった。すなわち、私たちは全きいけにえとなって、十字架に死なれた神の御子キリストに触れることによってのみ、その罪がきよめられるのである。

その時、イザヤは「私を遣わしてください」ということが出来た。献身とは自分に死に、罪をきよめられ、従うことであり、しかも従う時には条件をつけずに、何時でも、何処へでも従うことである。

「私は何も知らないことがわかってきた。知っていると思う者は知るべきことすらわかっていない。謙遜な思いを生涯持ち続けてほしい」弓山師の語る言葉は、中途半端な知識で高ぶりやすい学生にとってズシリときた一言であった。また、先生ご自身の事について、神召教会時代、教団創設、ジョン・クレメント先生との働き、受霊などの出来事を語って下さった。特に受霊の体験について、「一週間も突



大切である。午後からは食事を共にしながら、神学校生活の紹介がなされ、和やかな雰囲気になりました。その中で、各部の奉仕活動の紹介がなされたが、それは実にユニークのものであった。運動不足になりがちな神学生の体力強化を図る運動部は、なんと「あひるのダンス」を演じてくれた。また、学校の環境を整え、美化を推進する作業部は、エプロン姿で、数十に及ぶの作業内容を歌にして披露してくれた。

バライエティに富んだ一日体験入学であったが、この機会を通して、参加者の献身への思いがいよいよ堅くされ、来年の四月には、多くの兄弟姉妹が、この駒込の山に登って来ることを願ってやまない。

「目をあげて畑を見なさい。はや色づいて刈り入れを待っている」。(ヨハネ四：三五)



然訪れた恵みの瞬間、内と外から大水があふれて、聖霊に完全に支配された。…まるで説教を聞いているようで、次々に語られる神の御業に感動しながら、学生達は聞き入っていた。

「大きな河は小さな河を、大きな海は小さな海を受け入れて存在している。」「語ると偉大な心を持つ大きな人物になってほしい。」「弓山師の学生に期待する期待と励ましに、胸が熱くなる思いであった。最後に先生は「雑草のように踏みじられなくても、泥をかぶっても何度でも起きあがる、そういう人物になってほしいね」と締めくくって

